

Title	「鬼」はどこから来たか
Author(s)	早瀬, 尚子
Citation	Osaka Literary Review. 29 P.1-P.9
Issue Date	1990-12-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25458">https://doi.org/10.18910/25458</a>
DOI	10.18910/25458
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 「鬼」はどこから来たか

早瀬 尚子

## 1. 序

もうかなり前のことになるが、私の周りで次のような表現が頻繁に用いられていた頃がある。

- (1) a. 鬼のように走る。
- b. 鬼のように勉強した。
- c. 鬼のように準備する。
- d. 鬼のような宿題の量だ。
- e. あの寮では起床時間が鬼のように早い。

この表現は一見大変奇妙に見える。全て「～のような」という表現を用いた直喩の例であろうが、この奇妙さは「走る」「勉強する」といった動作を修飾するにも、「量」にもそして「早い」という状態形容にも共通して「鬼」が用いられていることに由来する。これらの発話を解釈すれば、

- (2) a. 鬼が走るような走り方をする。
- b. 鬼が勉強するような勉強の仕方をする。
- c. 鬼が準備するように...(?)

となるのであろうか。これはどう見ても滑稽である。鬼は何でもできるオールマイティな存在なのか。ここに一連の「鬼」解釈に理不尽が生じる。

しかし強調しておきたいのは、これらの発話が意味を成さない nonsense な発話としては見られていないことである。これらは滑稽さを保持しながらも、立派にその意図されるところを伝達しているのだ。我々はこの発話

を聞いてその人が単に「走る」「勉強する」以上の「理解」を受け入れる。それは何故なのだろうか。「鬼」の何が我々の理解を可能にしているのだろうか。

## 2. 類似性の認識

ここで列挙した「鬼のように」という表現は直喩である。「ものごとの様子を表現するためにたとえる表現」(『レトリック感覚』)でお馴染みのものである。

直喩は従来かなり議論されてきた問題である。その根底にあるのは「類似性」であり、Ortony (1979) は、A is like B といったとき、Bの最も顕著な predicate (それはAのあまり目立たない predicate となる) を発見することがこの直喩の解釈だと述べている。だから B is like A とはいえず、直喩が単なる比較とは異なるという根拠となる。いずれにしても直喩表現には  $P=Q$  とでも言うものが成立するための類似する要素があって、その類似性の発見にはある程度の意外性が要求される。ありきたりで自明のこととされている類似性をもって「直喩化」してもそれは比喩表現とは見なされない。

(3) a. コウモリは鳥に似ている。

b. ウナギはヘビのようだ。 (山梨 1988 p. 31)

これらは言ってみれば話者と聴者に予め共有された類似性を認識するものでしかない。直喩が比喩として成立するには「何らかの新しい認識がかかわっていなければならない」(山梨 1988 p. 31) つまりこんな見方もあったのかという surprise value が必要なのだ。この点この「鬼のように」は論理的な整合性もなく、むしろ奇妙な印象を与える。

この「鬼」表現は単なる比較ではなく、類似性が認められ、その背後では「鬼」という語の意味の「変化」が起こった表現である。つまり(3)のような単なる比較においては語義の意味変化は行われていない。ヘビはヘビで

あり、鳥は鳥なのである。

- (4) a. この部屋は昼のように明るいね。  
b. 今日は12月のように寒い。  
c. 鬼のような顔をしている。

ここでは最初のアンダーラインの部分の持つ顕著な属性が、後に出てくるアンダーラインの部分で表現されている。つまりここでの「明るさ」は「昼」の持つ明るさに匹敵するものであり、それを描写した記述文だといえる。特に (4c) は顔の特徴が鬼のそれに匹敵するということを描写している。これに対して

- (5) 鬼のように勉強する。

このような例ではこの関係は当てはまらない。つまり「勉強する」というのは「鬼」の特性であるのかというところは甚だ疑問が生じる。日本の文化的コンテクストに照らし合わせても、そのような属性はまず認められにくい。しかしわざわざ「鬼」という表現を用いているからには何らかの関係があるはずである。単なる比較のレベルではこの二つは相容れない。とすれば、考えられることは「鬼」の意味が変化しているのではないかということだ。「名詞＋ように」といった場合にその名詞（ここでは「鬼」）には一種の転義が起こっているのである。

### 3. 情緒的内包

「鬼」の厳密な特性については我々は詳しいことは知らない。というのも「鬼」は空想上の存在であり、その概念を規定するような特質は正確には得られないからである。しかし我々は(1)に挙げた例の発話を理解しよう。鬼についての乏しい知識体系のなかで何処に類似性を見出したのか。

鬼との類似性は（誰も見たことがないから）純粹に客観的であることはあり得ない、もしくは難しい。もちろん本や銅像、東大寺の金剛力士像な

どをみての比較的「客観的」イメージは可能である。例えば、

- (6) a. あいつ鬼みたいな顔してるな。  
 b. まだ練習しろだなんてあのコーチ、鬼みたいね。

(6a) の表現は、主観的に見た鬼の feature との「客観的」な類似性と言える。しかし例えば「あいつ今日は鬼のような顔をしている」であれば、昨日と今日とで顔の feature が異なることは考えられないので、ここでの類似性は主観的なものということになる。(6b)の方はコーチに対する感情の比喩的表現であり、客観性は見だしにくく、より主観を反映している。にもかかわらず、その感情こそがここで言う「鬼」の他ならぬ意味の中心の役割を果たしているのである。

大修館英語学事典による meaning という項をみると Leech (1974) の分析を参照しており、それによれば、意味は様々な種類に分類できるが、その中に内包的意味 (connotative meaning) というものがある。この説明によれば、例えば woman という語は次のような意味構造を持つ。

woman <人間><成人><女性>  
 <母性本能をもつ><スカートを履く><感受性が強い>

上の列に挙げたものは概念的意味であり、woman という語を本質的に、内的に規定する。一方、下の列に挙げたものは内包的意味と呼ばれるものであり、生理的、文化的、社会的な特徴であり、いわば外的に付加されたものだといえる。

これと並行する論が『新英語学事典 (研究社)』の meaning の項にも見られる。ここでは言語機能が意味を喚起する機能を指示的、描写的、感情的の3種類に分け、各々の機能によって喚起される意味内容としてそれぞれ概念的コノテーション、直感的コノテーション、情緒的コノテーションという内包を認めている(『新英語学事典』)。概念的コノテーションは、語の指示対象の形や性質、動きや用途などの概念総合によって成り立つもの

であり、直感的コノテーションは概念的思考を通さずとも言語記号から直接思い浮べる事物一般を指すものである。さて3つ目の情緒的コノテーションは言語記号によって喚起された感情のことである。この感情というものは語の意味の規定という点では外的な要因であり、主観が入りやすい部分でもある。

鬼との類似性を生み出す源となるのは「鬼」についての概念的内包ではなく、イメージ的なもの、喚起的、情緒的内包である。これは人によって様々でありうる主観的な記述が言葉に付随した例である。またそれが共通に認識されるとき、それは一種のプロトタイプ効果だといえる。「鬼」が「怖ろしい」というのは鬼の特性ではなく、鬼について我々の抱く主観的な感情である。これらの情緒的コノテーションは、新たなる視点で得られた印象、解釈を伝えるものである。<sup>1)</sup>

ここで言う「鬼」は空想の人物であるが故に、より一層我々（特に日本社会で生きるものにとって）の想像力を喚起し、そのイメージを浮き立たせ、鬼に対する情緒的コノテーションを促進させてきたのである。その結果、敢えて言語化してみれば、「鬼」という言葉には「物凄く恐ろしい形相」「エネルギー」とでも言うような情緒的「鬼」に基づくプロトタイプ効果が生じ、それが一般に受け入れられた結果「鬼」のステレオタイプとして成立するようになったのである。

例えば

(7) 彼は鬼のように勉強している。

下線の「鬼のように」は勉強している「彼」のreferentに対するイメージが「鬼」というものに対して抱いているイメージと合致したと考えられる。「鬼」はすさまじく大きく何事もダイナミックで、破壊的な力を持っている...等のイメージが、「彼」の勉強の仕方からもレベルを変えて感じられたというわけだ。

このような感情的内包が意味の全面に用いられている例は日常でも多々

見られる。

- (8) a. 蝶のように舞う  
 b. カモシカのような脚  
 c. 美しい蛭のような唇 (『雪国』川端康成)

このような表現を発したとき、「蝶」や「カモシカ」に対して人は予め何らかのイメージを持っているはずで、そのイメージが感情的内包として加わる(8c)あるいは全面に押し出される(8a,b)。それは一般にも受け入れられるような expressive なものであったり或はかなり奇抜性を感じる suggestive なものであったりする。<sup>2)</sup>何れにせよこの感情的内包には人間の新たな独創性が生じる余地があり、人とは異なる見方をしたならばそれは作家や詩人によく好まれる言葉となる。

- (9) 「ほこり」というようにまるく笑った。

(「銀座のカラス」椎名誠 朝日新聞朝刊7月)

ここの「まるく」はかなり奇抜性をもつ表現である。ここでは「まるく」は「まるのような」とはなかなか言い換えが効かないものだが、「鬼のように」と同じく動詞を修飾する副詞的役割を果たす。実際は「丸く」笑うことは不可能だけれども、ここでは笑った彼女に対して話者が抱いた感情が「まる」という言葉から喚起される。「まる」は「円」という概念的な意味以上に、「人が角が取れて丸くなった」などの例に見られるように暖かい温和なイメージを喚起させる。話者は女の人の微笑を見てある感情を感じ、その感情を代表する言葉として「まる」を選んだのだ。この感情が「まるく」という表現の動機付けとなる。

#### 4. 慣用化

慣用化すると個人はもうその類似性を発見しない、言い換えればそこにあるのは「個人の目を通した類似性」ではない。この「鬼のように」が慣

用化されれば、誰かの使用をそのまま真似することになり、Dead metaphor への道がここに開かれ、「鬼のように」と言えば必ず人の心に共通の感情を喚起するようになる。

しかしこの表現に関する限りまだ辞書化はしていない。多くの人に共通に用いられる様になるにはそれなりの motivation が要るものだ。前提段階としてある程度の共通認識が、つまり「鬼」に対する固定したイメージが（たとえ部分的にでも）人々の間に回っているということが必要だろう。既に多くの人々に受け入れられて共有され、表現自体がむしろ形骸化してしまいかけているかもしれない極端な例の一つは次のような例である。

- (10) a. 寅さんはチャキチャキの江戸っ子だ。<sup>3)</sup>  
 b. あの人は末っ子みたいに言い出したら聞かないところがあるから。  
 c. After all, we're not savages. We're English: and the English are best at everything. (*The Lord of the Flies*. William Golding)

「江戸っ子」は厳密には江戸（東京）で生まれ育った人、「末っ子」はもちろん兄弟で一番最後に生まれた人を指して言う言葉であるはずなのだが、それ以上の意味がこの一文からでも伝わってくる。つまり、「江戸っ子」は例えば気性がさっぱりしている、末っ子は我がままで甘えん坊だなどと言うような、本来ならばその語の概念的意味ではなかったはずの意味が付加されている。これと社会的状況を一般化した結果生じる一種の感情的内包である。逆に言えば「江戸っ子」=「気性のさっぱりした人」と感じられる程密接な連想が生じるようになると、元の表現は如何なる文脈でも固定した意味を持つようになる。また (10c) ではコロン以下で後述されるように English という言葉に特別の意味が込められている (the English = 優れた国民)。

これほどまでの感情的内包の拡大が「鬼」に対しても起これば、「鬼のように」が語彙として辞書に固定される土壌はできたことになる。「ものすご



く」「大変な勢いで」「すごい意気込みで」などを意味するためには「鬼」自体に対するイメージつまり感情的内包が予め必要であり、それが対象についてのイメージ、様子と合致したときにこの読み方が成功する。<sup>4)</sup>

しかしこのような感情的内包はごく一般的に受け入れられてはいても、またある部分では真実ではあっても、時として妥当性の疑わしい不当なステレオタイプを形成する。元来無関係である概念が付与されるメカニズムは、佐藤（1978）も指摘するようなイデオロギーの創造のメカニズムでもある。これは偏見と呼ばれる。スーザン・ソントグは『隠喩としての病い』の中で「癌」とその隠喩について考察している。「癌」は或る一つの肉体的病を指す名前であったのに、この言葉にまつわる感情が様々な隠喩を生み、特に癌患者に必要以上の苦痛と恐怖を背負わせていると指摘している。

「癌」という言葉には「何か不吉で感覚的におぞましいもの、吐き気のするようなものが感じられ」、この語を隠喩として用いた場合、「何よりもその事件状況が手の施しようもないほど徹底的に悪いものがあると決めつけ」るようになる。感情的内包が横行している例である。

鬼はもしかすると我々の創りあげたイメージに迷惑しているかもしれない。

## 5. 結論

以上「鬼のように」という多少奇抜な表現を中心に、比喩的表現の発生から慣用化までについての考察を行った。この表現から分かるのは、「鬼」に我々は多大な負担をかけているということ、つまり「鬼」の本質規定ではない我々の主観の反映である感情的内包までもこの「鬼」という言葉に託してしまうことである。この主観は時には新しい視点や表現の可能性の切り口を提供するが、全くの偏見となることもあり、言葉の操作によってその referent に対する大衆の偏見を操作できる可能性も出てくる。言葉の意味には多分に主観が込められるということが、何でもない比喩表現からも明らかになる。「鬼」はどこから来たのか。「鬼」は私たちの心の中から

生じてきているのである。

### 注

- 1) 感情的内包に着目して別の言語事象を扱ったもの(提喩)に大森(1989)がある。感情的情緒的要素が言語表現に、特に比喩表現に関連するという視点を筆者も持っている。
- 2) Mac Cormac, (1985)では Wheelwright (1962)における Epiphor と Diaphor の区別について触れている。どちらもメタファーの下位区分で、Epiphor の主な働きは“to express”であり、Diaphor は“to suggest”である。前者は類似性を強く感じさせ、意味的な違和感は少ないが、後者はその非類似性もかなり強く、奇抜な印象を与える。意味変化の推移は Diaphor から Epiphor へ、そして ordinary language へと移行するとする。
- 3) これらの例は佐藤(1979)の言う「逆隠喩」に相当するものである。「逆隠喩」は感情的内包に関連するものと筆者は見なしている。つまり情緒的内包は概念的意味に捕らわれている言葉をその砦から開放する、つまり意味拡大を促進させる働きをするのである。全くの転義ではないにせよ、意味射程のずれが起こっている点においては転義が生じていると考える。

### 参考文献

- グループ  $\mu$ /佐々木健一・樋口桂子訳 (1981)『一般修辞学』大修館書店。
- Levinson, S. C. (1989) *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- Mac Cormac, Earl R. (1985) *A Cognitive Theory of Metaphor*. MIT Press.
- 松浪 有他編 (1983)『大修館英語学事典』大修館書店。
- 大森文子 (1989)「提喩に関する一考察」*Osaka Literary Review* 28.
- Ortony, A. (1979) “The Role of Similarity in Similes and Metaphors”. in Andrew Ortony, (ed.), *Metaphor and Thought*. Cambridge University Press.
- 佐藤信夫 (1978)『レトリック感覚』講談社。
- (1987)『レトリックの消息』白水社。
- 瀬戸賢二 (1986)『レトリックの宇宙』海鳴社。
- Searle, J. R. (1979) “Metaphor”. in Andrew Ortony, (ed.), *Metaphor and Thought*. Cambridge University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson (1986) *Relevance*. Basil Blackwell.
- スーザン・ソントグ (1982)『隠喩としての病い』みすず書房。
- 山梨正明 (1988)『比喩と理解(認知科学選書17)』東京大学出版会。
- 安井稔 (1978)『言外の意味』研究社。